
蛇に憧れる男の異世界生活

H L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇に憧れる男の異世界生活

【Nコード】

N0637M

【作者名】

H L

【あらすじ】

ゲーム大好きな高校生篠崎 幽は完璧超人の幼馴染み原川 幸と加藤 柚姫といつもの日常を過ごしていた。ある日幼馴染み二人のよくありそうな異世界トリップに巻き込まれてしまう。そしてついた場所は剣と魔法の世界。

いつもの俺達の日常（前書き）

ケータイからの投稿なのでパソコンの人は見づらいと思いますが見ていただけると嬉しいです。

いつもの俺達の日常

カチャカチャ、カチカチ。え？なにやってるかって？今俺はメタギアソリッドというゲームをやっている、最近PSPにでた方だ、わからない人は是非調べてくれ。

いやはや、やはりスークはかっこいいな。本当憧れるな。え？俺は誰かって？

俺の名前は篠崎しのざき 幽ゆう高校生だ。好きなものはゲームで主にアクション系のゲームをよくする。学校の成績は普通で容姿は普通だと思っ、運動神経はいいほうだ。

「おい、やられてるぞ。」

「なんだって！」

急いでPSPの画面を見るとゲームオーバーになっていた。

「せつかくあそこまでゲージ減らしたのに！」

「お前がボーツとしてるのが悪いんだろ。」

今俺の部屋の床で寝そべりながら話しているのは俺の幼馴染み兼親友兼同級生の原川はらかわ 幸しゅんだ。容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群、まさに完璧超人！………はぁ〜イケメン滅べばいい。

「ん？なんか今殺気が。」

「気のせいじゃないか？」

ちっ！無駄に勘のいいやつめ。

ピンポン

突然インターホンがなった。多分アイツだろ。

「ちょっと行ってくる、多分アイツだろ。」

「いつてらっしゃーい。」

ゴロゴロしながらコウが答える。こいつ人の家でよくもまあこんなにリラックス出来るな。まあいつもの事だからいいけど。そう思いながら玄関に向かう。

「はーい、今開けます。」

ガチャ

扉を開けるとポニーテールの美少女もといもう一人の幼馴染みの加藤 柚姫がいた。

「コウ遊びに来たぞ！」

ユズは名前の通り女なのだが性格と言葉使いが男っぽいので同年代の男性から姉さんや姉貴と呼ばれ、女性からはお姉さまと呼ばれ多くの女性たちを間違った道へ導いてきた。こいつもコウと同じように完璧超人だ。

「飯食ってコウとイチヤイチヤして帰るの間違いじゃ無いか？」

「イチヤイチヤなんかしていない！」

顔を真っ赤にして否定しているが二人は付き合ってる。本人達は否

定しているが周りの人達はコウとユズはお似合いカップルだと言っていたし俺も付き合ってるって信じている。

「俺は二人がいつか打ち明けてくれるのを待っているよ。」

「だから！違うって！」

「ハイハイ、分かったから飯出来るまで上でコウとイチヤイチヤしてて。」

「絶対分かってないだろ君！」

「何言ってるんだ？お兄さんはすべて分かってるぞ。」

「もういいよ！ユウのバーカ！わからず屋！鈍感！朴念人！」

わからず屋は分かるが鈍感と朴念人って何のことだ？そう言っユズは二階に上がって行った。

「さあーてとさっさと飯作るか。」

なぜ俺が飯を作っているのかというと5年前親が交通事故で死んでしまったからだ。何でもトラックの運転手の余所見運転で起きた衝突事故らしく運転手の人が葬式場に謝りに来た。泣きながら俺に謝り土下座までしようとしたのでさすがに止めた。俺は運転手の人を恨むことが出来なかった。コウやユズにお人好しと言われたが否定出来なかった、そしてコウとユズは俺を抱き締めながら一緒に泣いてくれた。葬式の後親戚の伯父さんが家に来ないかと言ってくれたのだが断った。両親が残したこの家と幼馴染み二人と離れたくなかったからだ。

おっとなんかしんみりしてしまったな、まあそうゆう理由で俺は一

人暮らしをしていて飯などは自分で作っている。コウやユズの両親は仕事が忙しくなかなかに帰って来れないので俺が面倒を見ている。よし出来た、今日は鳥の唐揚げだ。

「おい、二人とも出来たぞ下りてこい。」

返事をして二人とも下りてきた。

「ごはん ごはん 今日のごはんはなーにかな？」

ユズがなにやら可愛い歌を歌っている。ユズは男っぽいのだが女の子らしいところもよく見せる、そのギャップのせいかよくもてる。

「今日は唐揚げだぞ。」

「やったー唐揚げだー！」

「ユズうるさいよ。」

喜ぶユズにコウが注意する、だいたいいつもこんな感じだ。

「いただきます。」

「いただきます。」

二人が同時に唐揚げを食べる。

「美味しい！」

「うまいな。」

二人が美味しいと言ってくた、ユズは半ば叫ぶように言ってコウはユズみたいに叫ばなかったがうまいと言ってくれた。

「二人がそう言ってくれると作った甲斐があるよ。」

俺はこの時間が何より好きだ。

「「「ごちそうさまでした。」」」

そうして食べ終わったら二人は帰る。

「じゃあまた明日。」

「おう！また明日。」

「うむ、また明日。」

ちなみに今のは上から俺、コウ、ユズの順番だ。そうして1日が過ぎて行った。今の俺はまだ知らなかった、一番好きなこの日常が簡単に崩れることを。

いつもの俺達の日常：二階での幼馴染みの会話

ドタドタと階段を上がってくる音がする。誰が上がって来たのかは予想ができる。

「バーン!!」

凄い音がしてドアが開きユズが顔を強張らせて入ってくる。

「ユズもつと静かに入ってこれないの?」

「うゝこれも全てコウのせいだ!」

「俺が何をした!?」

何もしていないのに怒られた、理不尽だ。

「うるさい、ホモ!」

「俺はホモじゃあない! ノーマルだ! それに俺はユウが好きなんだ。」

はつきり言って俺はユウが好きだ、こらそこ引くな。その理由はユウは女の子の顔をしているからだ、俗に言う男の娘というやつだ、しかも家事が得意で声も高く言葉使い以外は完璧に女の子だ。性格も人懐っこく優しいので本人は気付いて無いが男女両方にモテていて、下駄箱のラブレター等は俺とユズが処分している。

「あれに惚れるなど言うのが無理な話だろ?」

「う、まあそうなんだけど、でもユウは渡さない!」

「言つてろ、まあいい下で何があつたか教える。」

俺はユズから下であつた事を聞いて気分が落ち込んだ。ユズと俺が付き合つてる！？やめてくれマジで、どうゆう勘違いしてんだあいつ？

「君にそんな顔をされるとものすごく腹が立つんだけど。」

「仕方ないだろ、嫌なものは嫌なんだから。」

ユズがこつちを睨んできたが無視だ。

「ごはん出来たよ！」

ユウのこの声でユズの顔が緩みご機嫌になる。

「やったーごはんだ！」

ユズと俺はユウの作ったごはんが大好きだ。ユウの料理はプロ並みにうまい。もうお嫁さんにしたい位だ、そんなことを考えていると何を感じ取ったかこちらを睨んできた、エスパーですか？

冒頭から柚姫サイド

私はドタドタと階段を上がる、思い出すだけで腹が立つ、なぜ私がコウの彼女なのだ！？それにユウは鈍感でこつちの気持ちにまったく気付いていない。
バアン！！

私は思い切りドアを開ける、部屋の中にはコウがいた。

「もっと静かに入ってこれないの？」

平然とした顔で文句を言ってくる。何かコウの顔を見たらさらに腹が立ってきた。

「うゝこれも全てコウのせいだ！」

「俺が何をした！？」

「うるさい、ホモ！」

「俺はホモじゃあない！ノーマルだ！それに俺はコウが好きなんだ。」

それをホモと言うのがわからないのだろうか？

「あれに惚れるなど言うのが無理な話だろ？」

「う、まあそうなんだけど、でもコウは渡さないよ！」

コウは私のだ！

「言ってる、まあいい下で何があったか教えろ。」

私が下であった話を話すとコウの顔がものすごく嫌そうな顔になった。

「君にそんな顔をされるとものすごく腹が立つんだけど。」

「仕方ないだろ、嫌なものは嫌なんだから。」

殴っていいかなこいつ？

私はコウを思い切り睨む。

「ごはん出来たよ！」

何分が経つと下からユウの声が聞こえてきた。なんだかさっきのことがどうしてもよくなってきた。

「やったーごはんだ！」

私はユウの作ったごはんが大好きだ。だから何よりユウの作ったごはんを優先させる。階段を降りてる途中コウから不穏な気配がしたので、睨んでおいた。

崩れ去る俺達の日常

「好きです、付き合ってください！」

皆さんこんにちは、なぜこんなことになってるか今の状況を説明しましょう。今は学校が終わった放課後、コウと一緒に校門でユズの部活が終わるのを待っていました。さて皆さんもうお分かりでしょうか？学校と放課後とイケメンと言えば告白です！好きな人にI LOVE Youと言うあの告白です！あ、もちろんコウにですよ。普通顔の俺に告白なんてあるわけ無いじゃないですか、はははははあ。

「ごめん、君とは付き合えない。」

「ど、どうしてですか！？」

名も知らぬ女子生徒は涙目でコウに理由を尋ねる。なんかよくありそうな展開だな、対するコウは「それは…。」と言い詰まっている。受ければ良いのと思っているとコウがこっちをチラッと見た、何だろう？

「俺には好きな人がいるから無理です。」

ん？さてよ、知り合いがこのセリフを聞けば普通だったらユズが思い浮かぶ、だが告白をしたと言うことはコウとユズの関係を知らない、しかもコウは理由を言う前にこちらを見た、と言うことは女子生徒は、コウの好きな人「俺」になるのでは！？しかもフラれた女子は思い込みと八つ当たりが激しい、完璧誤解されてるじゃん。

「そうですか、わかりました。」

そう言つて女子生徒はこつちを殺意と嫉妬が混ざつた目で睨み走り去つて行つた。待つてくれ名も知らぬ女子生徒よ、誤解だ！こいつの好きな人は俺じゃあない！

「どうしたんだ？そんな人生終わったような顔して。」

「どうしたんだ？じゃあない！完璧誤解されただろうが！」

「誤解？なんの？」

「お前の好きな人が俺だつて勘違いされたんだよ。」

「俺は別に構わないけど。」

「構えよ！お前の好きな奴はユズだろ！」

「は？なんで俺がユズのこと好きにならなきゃならないんだ？」

「いいよ別に誤魔化さなくて。」

「待たせたな…つて何しているんだ？」

どうやら口論している間にユズが来たようだ。

「やあユズ、遅かったね何かあったの？」

「ん、まあちよつとな。」

「また告白されたみたいだね。」

「当たり前だ。」

「で、受けたの？断ったの？」

「もちろん断ったよ、私にはユウがいるからな。」

ちよつと頬を赤らめてユズが答える、コウの名前を言うのが恥ずかしいからって俺の名前を言わなくてもいいのに。だが問題はそこじゃない。

「まさかと思うけどその事を相手に言ったの？」

「ああ、言ったぞ。」

「男、女どっち？」

「両方だ。」

ああ終わった、俺の学校生活終わったよ。と言うより何故ユズは拗ねている？そして何故コウはユズを嘲笑っている？

「もういいや、帰ろう。」

そして俺達は家に向かって歩き出す。なにやらコウとユズが後ろの方で口論していたが何だろうか？

「うわ！」

「きゃっ！」

しばらく歩いていけると後ろの方から悲鳴が聞こえてきた。何だろう？と振り向くとコウとユズが光る魔方陣の上で立っていた。

「なにしているの？」

「足が、動かないんだよ。」

「ユウ、助けてくれないかい。」

これはもしかして小説で読んだ異世界トリップ！？と言うことはこの二人はどこかの世界の勇者に選ばれたことになる。そしてこれは小説でよくある巻き込まれフラグだ、だが俺はフラグに打ち勝つ。

「すまん、今日はスーパーの特売日だった、だから無理。」

「お前は幼馴染みより特売日を取るのか！？」

「では、さらばだ！」

まああいつらならあっちに行っても生きていけるだろう、主人公補正的なもので。それにイケメンがこの世界から一人消えるしな。そう思っていると突然ガシツと肩を掴まれる。

「逃がさないよユウ。」

後ろを向くとユズが俺の肩を掴んでいた。

「やめろ！離してくれユズ！」

「こうなったらユウも道連れだよ。」

必死にもがくがユズの手が外れない、どうゆう力してんだ！？最後の力を振り絞って思い切り振りほどくとユズの手が外れた。コウ達から薄情者などの罵詈雑言が聞こえるが無視する。そして十秒ほど経つと二人は光に包まれて消えてしまった。天国の父さん母さん、貴方の息子はフラグを乗り越えました。

そう感動していたのもつかの間、突然地面が光だした。おそろおそろ下を見ると魔方阵が書かれていた。

「なんでだー！」

天国の父さん母さん、やっぱり無理でした。そして目の前が真っ白になった。

崩れ去る俺達の日常・告白された幸の心情（前書き）

ちよつと修正などしたので文がかわっています。

崩れ去る俺達の日常：告白された幸の心情

「好きです、付き合ってください！」

今は学校が終わった放課後、ユウと一緒に校門でユズの部活が終わるのを待っていたら突然知らない女子生徒に声をかけられて今現在に至る。

「ごめん、君とは付き合えない。」

「ど、どうしてですか!？」

どうしてと聞かれても…ユウが好きだとも言えないしなぁ…ここにはユウがいるし。

「それは…。」

チラッとユウの方を見してみるとユウが頭の上に？マークが付きそうな顔をしていた、ヤバい可愛すぎる。俺は顔がニヤケそっなのを我慢しながら女子生徒に返答を返した。

「俺には好きな人がいるから無理です。」

よし！これなら女子生徒も納得してくれる筈だ。

「そうですか、わかりました。」

そう言って女子生徒はなぜか殺意と嫉妬が混ざった目でユウを睨み走り去って行った。あれ？何か間違ったか、俺？そしてなにやら暗

い顔をしているユウがいたので話し掛けてみた。

「どうしたんだ？そんな人生終わったような顔して。」

「どうしたんだ？じゃあない！完璧誤解されただろうが！」

「誤解？なんの？」

俺なんか誤解されること言っただけ？

「お前の好きな人が俺だって勘違いされたんだよ。」

そうか、ユウの方をチラッと見たからそれで女子生徒は気付いたのかあの女子生徒なかなか勘がいいな、それとユウそれは誤解じゃないぞ。

「俺は別に構わないけど。」

さりげなく告白してしまった、まあユウのことだからどうせ……「構えよ！お前の好きな奴はユズだろ！」ほらこのとおり気付かないかなり鈍感。そして勘違いしている。

「は？なんで俺がユズのこと好きにならなきゃならないんだ？」

頼むからやめてくれその勘違い、物凄く嫌だから。

「いいよ別に誤魔化さなくて。」

誤魔化してない！本当だから！

「待たせたな…って何しているんだ？」

どうやら口論している間にユズが来たようだ。

「やあユズ、遅かったね何かあったの？」

「ん、まあちよつとな。」

「また告白されたみたいだね。」

「当たり前だ。」

「で、受けたの？断ったの？」

「もちろん断ったよ、私にはユウがいるからな。」

ちよつと頬を赤らめてユズが答える、それでも気付かないのがユウだ。

「まさかと思うけどその事を相手に言ったの？」

「ああ、言ったぞ。」

「男、女どっち？」

「両方だ。」

ああ終わった、そんな顔をしながらユウは涙目になっていた。ユズはユウに告白にも似た言葉に気付いてもらえず拗ねていたので嘲笑

ってやった。

「もういいや、帰ろう。」

そうユウが言って俺達は家に向かって歩き出す。

「よくも私のこと嘲笑ってくれたね。」

ユズがこっちを恨めしそうな目で見ながら話し掛けてきた。

「ああ、かなり愉快だった。」

そう言くと横から鉄拳が飛んできたのでよけ無視をする。横で何か言ってるが無視だ無視。そうやってしばらく歩くと突然地面が光りだして体が動かなくなる。

「うわ！」

「きゃっ！」

ユズの叫び声が聞こえたと言うことはユズも同じ状況みたいだ。

「なにしているの？」

ユウだけが平然と立っていた。

「足が、動かないんだよ。」

「ユウ、助けてくれないかい。」

いろいろな知識をもったユウなら対処法がわかるかも知れない。そ

う思いユズと一緒にユウに助けを求めるとユウはなにか考え決心したような顔をして言った。

「すまん、今日はスーパーの特売日だった、だから無理。」

「お前は幼馴染みより特売日を取るのか!？」

「では、さらばだ!」

そう言っただけで逃げようとしたユウの肩をユズがガシツと肩を掴む。

「逃がさないよユウ。」

「やめろ!離してくれユズ!」

「こうなったらユウも道連れだよ。」

ユウは必死にもがくがユズの手が外れない、いいぞそのまま掴んでる。だがそれも長くは持たずユズの手がユウの肩から外れた。

「薄情者!」

「裏切り者!」

ユウに罵詈雑言を並べるがユウは耳に手を当てて無視を決め込んでいる、後でお仕置きしてやる。そう思っていると目の前が真っ白になり意識が途絶えた。

「ここ何処ですか？」

気がつくと奇妙な所にいた、周りは空間がぐちゃぐちゃに歪んだような感じになっている、Where?ここ何処？

「ここは次元の狭間じゃ。」

「!？誰だ！」

後ろから声が聞こえ振り向くと奇妙な仮面が浮かんでいて話し掛けてきた。

「ワシは『具現の仮面』、お主には試練を受けてもらう。」

「ちょっと待って！何のことだかさっぱりわからない、説明してくれる？」

突然ここに転移して仮面が喋って試練を受けろってわけがわからない。

「ふむ、すまん説明がまだだったな、ここはお主が暮らしていた世界とお主の友達が召喚された世界『エルシディア』の狭間でワシはこの狭間に封印されている具現の仮面と呼ばれている者だ、そしてワシがお主をここへ連れてきた。」

「何で俺をここに連れてきたんだ？」

「ワシはこの狭間に長い間封印されていて退屈でな、この狭間から出たかったがしかしワシだけではどうしようもなかった、そんな時

にエルシディアの世界からお主の世界へ大量の魔力が流れて行った、ワシは一か八かでその魔力に自分の魔力を忍ばせそして魔力を伝えて適合者であるお主を見つけたのだ。」

「ん？でも呼ばれたのってコウとユズなのにどうやって魔力を伝えて俺のことを見つけたんだ？」

「お主の友達が召喚される際に友達と接触しなかったか？」

俺は記憶をさかのぼってみる。……あつ！ユズに肩を掴まれた時か！ユズ、なんてことしてくれたんだ、せつかくフラグを回避したと思ったのに、文字通り道連れにされてしまったようだ。

「思い出したようだのう。」

「ああもうそれはバッチリと、ところで適合者ってなんだ？」

「適合者とはワシを扱える可能性を秘めた者のことだ。ワシの力は強大だ、それゆえに適合者でない者がワシを使えば欲望に吞まれ自我を無くす者も居れば力に耐えきれず死んでしまう者もいた、しかし適合者はワシを自我を無くすこともなく力を扱えることができる素質を持っている。」

「じゃあ試練は？」

「試練とはお主の力を試すことだ、適合者であっても最低限の力がなければワシの力に吞まれてしまうからのう。」

「俺に拒否権は？」

「無い。」

やっぱりですかコノヤロー！

「ちなみに俺は元の世界に帰れるのか？」

「今のワシにはお主を元の世界に帰す力はない。」

はあ、予想はしてたが仕方ないどうせ帰れないなら試練ってヤツを受けるか。

「わかった、試練受けるよ。」

「ならばワシを顔に装着しろ。」

一体どんな試練が待っているのかと考えながら俺は仮面を装着すると目の前が真っ白になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0637m/>

蛇に憧れる男の異世界生活

2011年10月7日02時37分発行